様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：１１５０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０２０２

研究課題名（和文）中世文学における伝承性とその視覚的展開に関する研究

研究課題名（英文）Propagation of Folklore in Medieval Japanese Literature and its Visual Expansions

研究代表者
菊地　仁（KIKUCHI, Hitoshi）

山形大学・人文学部・教授

研究者番号：５０１２５７６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、日本の中世文学に潜む民俗的な想像力を、その享受史の側から再検討を加えたものである。その際、江戸時代の絵画や芸能など視覚的な影響作品に着目した。
　その結果、伝承性の解明には、書物の挿絵や地方の演劇など周縁的な事象が重要となりうることを述べた。また、類型的と思われる絵画表現のなかに、典拠となった文学作品における「視線」の問題を示唆する場合がありうることも指摘した。

研究成果の概要（英文）：This study explores the potential of expanding folklore in Medieval Japan focusing on the historical aspects of its acceptance among people. In particular, visual arts like paintings and performing arts in the Edo era are examined. I argue that in order to fully explicate the potential of folklore in its propagating process it is necessary to observe peripheral phenomena such as book illustrations and local theatrical plays. It is also pointed out that stereotypical pictorial expressions depicted in those media often reveal the significance of ‘sight lines’ implied in the original works of literature.

研究分野：人文学

キーワード：伝承　視覚　図像

１．研究開始当初の背景

本研究は、科学研究費補助金・基盤研究（Ｃ）「院政鎌倉期物語の表現構造とその基盤に関する研究」(2007～2009) をひとつの端緒として構想された。すなわち、研究代表者として得られた当該研究の成果の一部、具体的には、古典文学作品の視覚造型化についての知見と問題意識との継承深化を意図したものである。

日本中世史の研究者である黒田日出男氏が 1980 年代半ばに提唱された「絵画史料論」や「歴史図像学」という概念は、従来の歴史学にとどまらず、日本文学・日本美術史などの諸領域を横断するスケールの大きさを持っていたがため、そののち斯界の学際的研究に対してはさまざまな形で影響を及ぼすことになった。特に本研究との関わりから注目したいのは、「絵画史料論」や「歴史図像学」が、なによりも「イメージ情報」を重視したことで、その結果、大文字の作家の画業と、無名の絵師たちの非個性的な作風とが、同列の「史料」（資料）として扱いうるようになった点である。

本研究代表者は、前述した科研費による研究期間の終了後、そのような問題意識をさらに発展させるべく 2010、2011 年にあいついで物語絵巻に関する論文を共著図書の形で発表した（『伊勢物語・享受の展開（伊勢物語・成立と享受②)』竹林舎、『物語絵・歌仙絵を考える―変容の軌跡（考えるシリーズ２)』武蔵野書院)。

本研究は、そのような問題意識の延長線上に企画されたものである。

２．研究の目的

上述した経緯を踏まえ、表現の類型性や定型化に着目しながら、日本の中世文学が視覚的な造型物として歴史上でどのような展開を見せたのか、そして同時に、そうした図像の変容は素材となった文学作品に対してどのような新しい価値に付け加ええたのか―それらの究明が本研究における主たる目的である。すなわち、その具体的な内容は、おおよそ次の２段階として集約できる。

(１)第１段階として、主に近世における中世文学の絵画的な類型表現を分類する。

もとより、文学作品というものそれ自体が絵画と関わっている場合は少なくない。当然、それは日本の中世文学においても同様であるが、本研究においては、伝承性という見地から、同時代的な絵画資料にとどまらず、と言うよりもむしろ後世の享受にこそ着目してみる。すなわち、まずは、江戸時代に類型化してゆく表現を収集分類してその意味を探ることである。

(２)第２段階として、近世の図像パターンから中世文学の隠れた伝承性を逆照射する。

本研究で対象とする視覚的な造型物とは、いわゆる著名な図像のみならず、広く江戸時代に見られる、草双紙の挿絵や工芸品の意匠あるいは芸能の舞台演出など、多岐にわたる。なぜなら、そうした言わば文学の周縁資料にこそ、伝承性の問題が見えやすいと考えられるからである。本研究では、そうしたさまざまな享受からの中世文学に対するあらたなる再評価が最終目標となる。

３．研究の方法

中世文学の伝承性について、図像の享受史から考察するための具体的な方法として、本研究では大きく、古注釈からの影響および地方芸能との関係、という２点を重視することから分析を試みた。

(１)中世文学を絵画化する過程に古注釈を介在させることで類型の意味を考える。

古典作品が引用される時、その過程には、原典そのものよりも、しばしば偽書的な逸脱を含む古注釈が媒介として作用することは、能（謡曲）にお

ける本説の場合などから明らかである。そうした傾向は、本研究が主たる対象とする近世期の造型物においてもおおよそ同様で、そのような変化のプロセスのなかから伝承性につながる問題点を浮びあがらせた。

(２)江戸時代における中世文学の民間芸能化を主に東日本の伝承例から分析する。

(１)にも述べたとおり、本研究のめざす目的からは、その対象として在地の芸能も重要な位置を占める。たとえば、中世文学における伝承性の解明という性格から、地芝居の舞台演出や祭礼の風流山車など、全国のさまざまな民俗行事における造型物も視野に入ってくるが、今回のプロジェクトでは当面、本研究代表者単独で補助事業期間内に可能な範囲として主に東日本の芸能を中心に調査した。

４．研究成果

本研究は、当初予定していたよりもやや大きな規模となったが、前述のように、その中心となる発想は、前掲「１．研究開始当初の背景」で言及した 2010 および 2011 年の２論文（「中世の『伊勢物語』注釈とその周辺―物語草子から近世絵画への波及―」「木の下で指さす人―和歌の視覚・絵巻の聴覚―」）における問題意識と直接的な関連を有する。したがって、そのあたりとの接点も明確にしながら、本研究の成果を以下の３点にまとめる。

(１)説話・伝承によるイメージ展開の再確認

物語文学作品の図像化される過程が、注釈や芸能などにおける享受と連動しつつ展開することは前記論文（2010）でも述べたところだが、その問題を本研究ではさらに和歌（あるいは歌人）の場合にまで拡げて検証した。具体的には、「５．主な発表論文等」雑誌論文②という形で報告したところだが、そこにおいてもやはり、『百人一首』の注釈書や、浄瑠璃に基づく草双紙の挿絵、あるいは人形「富士見西行」という工芸品など、さまざまな視覚的な造型物によってパターン化された伝承像が形成されてゆくことを確認できたなお、西行の伝説化については、「５．主な発表論文等」雑誌論文④でもふれた。

(２)和歌における表現主体とその視線

絵巻において、画中人物の視線と享受者（観者・読者）のそれとが、聴覚表現とも絡みあいながら複雑な様相を呈する問題は、前記論文（2011）および「５．主な発表論文等」雑誌論文②の一部でも取りあげた。そこから、そもそも和歌の場合、この問題は絵画化以前の、韻文表現それ自体に根ざすところが大ではないか、と推測してみたのが、「５．主な発表論文等」学会発表①であった。その発表では、対象を中世以前にまで遡らせ、類型的な視覚イメージ形成の淵源を探ってみた。なかでも、院政期あたりから顕著になる、いわゆる伝聞推定の助動詞「なり」を用いた聴覚表現との対比関係に留意した。

(３)民間芸能による在地への視覚的な伝播

江戸時代における中世文学の伝承像を考える時、各地方への民衆文化の拡がりも見逃せない要素であることは、「５．主な発表論文等」雑誌論文②で出版や伝説とも関わらせて述べた。そうした民間芸能によるイメージ形成の重要性を改めて考察したのが、「５．主な発表論文等」雑誌論文①と③である。そこでは、主に近世期に形成された東日本の伝説において、いかに古浄瑠璃（あるいは奥浄瑠璃）など芸能の介在が大きい役割を持つかを

検証した。特に、雑誌論文①においては、「皮籠」という舞台における小道具から地名伝説が生じてゆく点に注意した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　４件）

①菊地　仁、東北地方における炭焼き藤太・金売り吉次の伝説、山形民俗、査読無、2012、pp.86-96

②菊地　仁、見返る西行―伝承・絵画から和歌へ―、西行学、査読有、2013、pp.32-45

③菊地　仁、東北地方の“髪長姫”と“玉取姫”、国学院雑誌、査読有、2013、pp.124-137

④菊地　仁、桧原峠を越え行く西行―近世奥羽の地誌に見る伝説形成の一事例―、西行学、査読有、2015、（印刷中）

〔学会発表〕（計　１件）

①菊地　仁、和歌的想像力と詠作主体―八代集を中心に―、和歌文学会（６月例会）、2014/6/21、早稲田大学（東京都新宿区）

６．研究組織

(1)研究代表者

菊地　仁（KIKUCHI Hitoshi）
山形大学・人文学部・教授
研究者番号：５０１２５７６２

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし